

# 旧徳中・一高・城南高校 同窓会関東支部 渦の音クラブ会報

発行所  
渦の音クラブ事務局  
〒106-0032  
東京都港区六本木1-9-9  
六本木ファーストビル 7F  
生田・名越  
法律特許事務所  
S41卒 生田哲郎  
TEL 03-5574-8226(代)  
FAX 03-5574-8227

「渦の音クラブの集い」  
第三〇回を迎えて！  
会長 遠藤哲也

渦の音クラブが出来てからの三〇年は、世界にとっても日本にとっても、徳島にとっても、また私達それぞれにとっても、また私達それぞれの時代でありました。これからの三〇年はおそらく一層速いスピードで変わってゆくものと思われれます。  
そのような中で私達は毎日忙しく、少なくとも気分的には忙しく暮らして、最近では多忙ということがむしろ良いことのようにみられていきます。だが、「忙しい」とは字を分解すればわかるように、心を亡うことです。どんなに長生きしても一〇〇才少々ですし、その途中で思いがけない障害も出て来ます。この限りある人生をあくせくすることなしに、人のため、自分のために、どのような生活に有意義に過ごすかを若いうちから時々立止って考える必要がありましよう。  
故郷と学校(高校はわずか三年間ですが最も多感な時です。)を同じくするものが親交を暖める渦の音クラブはそのような機会の一つだと思えます。渦の音クラブを大事にしてゆきましよう。

## 第30回「渦の音クラブの集い」開催案内

2005年11月13日  
日曜日/正午から



会場は神保町学士会館 大会議室(210号)

参加費はお一人七千円、年会費は一口千円です。詳細は別紙総会案内状で！

今年度の講演会講師は「貯筋運動」の福永哲夫氏です。演題：「貯筋して、身体教養を身につけよう」

昨年の一月頃か?とある待合室で、何気なくそこにある冊子をばらとめくって見たら「貯筋術のすすめ」オヤ誤植?と思いつつ読んでみたら、バイオメカニクス研究の第一人者で、その学界ではノーベル賞ともいわれるすごい賞をもらった先生の「講演会」の案内。ナニ、ナニ、貯金は使えば減るが貯筋は使わないと貯まらない。お金と同じように貯えないと老後に後悔する。借金はできて、借筋はできない。中高年代に向けて「寝たきりにならない」

### 上野(美馬)千鶴子 村山(上野)知香



今年、三〇回記念にふさわしく、郷土の誇るピアノニスト上野千鶴子さんと、ソプラノの村山知香さんをお迎えしての「二世世代ジョイント・コンサート」を開催します。上野(旧姓美馬)さんは昭和三〇年城南高校入学後、芸大受験勉強のため転校されたようですが、旧知の方々には懐かしい再会となりそうです。今回、お母様が母校のために演奏してくださいとうことで、ご長女でオペラ歌手として活躍中の知香さん(因みに父上は城南S三一年卒の上野常裕氏)も、特別に共演してくださいることになりました。日々の雑事を忘れ、母・娘ならではの絶妙のハーモニーが鑑賞できる絶好の機会です。どうぞ素晴らしい演奏を、心ゆくまで堪能ください。

ソプラノ・村山知香 ○桐朋学園大学音楽科卒。同研究科二年終了。二期会オペラスタジオ終了。現在、二期会準会員。一九九五〜二〇〇〇年NHK川越文化センター講師。○ソプラノ・ジョイント・リサイタルの他、オペラ公演多数出演。○第4回万里の長城杯国際コンクール第3位入賞等。

### 懇親会・今年のアトラクションは ~ピアノ/とソプラノ/二世世代による~

ピアノ・上野千鶴子  
○東京芸術大学ピアノ科卒業。在学中、安宅賞受賞。NHK「タベのリサイタル」の放送、一九八五年の神奈川フィルと協演等の他、長年にわたり、リサイタル・ジョイントコンサートを重ねる。○二〇〇〇年からの新シリーズ「Voice」の第四回として、昨年七月、母・娘・ジョイント・リサイタルを開催。○相愛大学・北鎌倉学園講師等を経て洗足学園大学講師。

演奏曲目  
◆ピアノソロ(上野)  
リスト「リゴレット・バラフレーズ」  
ショパン「夜想曲 Op.9-2」  
◆ソプラノ(村山) ピアノ(上野)  
越谷達乃助(詩・石川啄木)「初恋」  
ブッチェーニ「歌に生き愛に生き」  
オペラ「蝶々夫人」より「ある晴れた日に」 他

「貯筋運動」を提唱している福永東大教授は徳島県出身!... 去年の渦の音クラブの集い。学士会館の受付。なんと、かの福永教授の姿が! 承れば、今は早稲田大学スポーツ科学部で、アテネ・五輪選手の強化訓練にも携わっておられた由。今回は、老化や加齢による様々な機能低下を最小限に食い止め、高水準の「生活フィットネス」を保障する身体諸機能を貯える方法を、動画による解説も交えて教えて頂きたいと思えます。

講師プロフィール... ○昭和三十五年城南卒。昭和四十六年東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。学専攻科終了。○昭和四十八〜五〇年西ドイツ政府留学生ケルン大学体育学研究所に留学。  
○教育学博士。○東京大学教養学部助教授。教授。同大学院生命科学系教授等を経て、現在、早稲田大学スポーツ科学部教授。東京大学名誉教授。○著書、筋の科学事典・朝倉書店、貯筋通帳・ワニマガジン他多数。○日本バイオメカニクス学会会長、トレーニング研究会顧問、日本ゴルフ学会副会長他多数。○2003年国際バイオメカニクス学会賞受賞、他

第二部は今年も、皆で歌いまshow!!を企画  
当番学年の思い出の曲、時代を超えての愛唱歌等を選曲中です。第二部の伴奏も校歌の伴奏も、上野さんが快くお引き受けくださいました。一年に一度、回想の心と共に素敵な午後、ひときわ時を過ぎて頂けるよう当番学年一同頑張ります。ご期待ください。

「今年の会場係は 昭和五十一年卒です」  
私たちは、戦後始めて景気の驕りを経験したとも言えるオイルショックで、世の中が右往左往する昭和四八年に入りました。総合選抜二年目で、まだパンカラな気風が残っていた気がします。  
郷土出身の三木武夫総理大臣が誕生したのは昭和四九年。ロッキード事件を徹底追及したあと私たちの卒業した五一年に同氏も辞められました。四九年には百周年記念同窓会館が完成し、学食で具の少ないカレーライスを食べたことや、宿泊訓練で泊まったことを昨日の日のように覚えていきます。あの建物が取り壊されることを聞き、少し寂しいような気がしています。  
在京者は約七〇名(本当?)今回を機会にもっと集まる事ができたらと思っています。  
(学年理事 米澤・四宮)

「理事会開催のお知らせ」  
○十月五日(水) 午後六時半  
○会場 品川・リスブラン本社会議室  
学年理事の皆様是非ご出席ください。詳細は事務局より別送します。

# 第29回 渦の音クラブの集い

総会・講演会・懇親会が  
平成16年11月7日(日)正午から  
千代田区・神田学士会館で開催されました。

会場係はS50年卒・受付係はS51年卒でした。



「総会報告」・・・・・・・・・・  
総会の司会進行は  
事務局長の生田哲郎氏  
会長挨拶の後……役員改選  
(3頁掲載・遠藤会長再選)、  
会計報告(8頁掲載)がされ  
満場一致で承認されました。



## 講演会

：昨年の講演会は、昭和四三年卒業の「暮しの手帖」編集長尾形道夫氏による「いまどきの健康迷信について」でした。

例年になく女性のご出席が多い同窓会でした。昼間の開催だったこともありましようが、講師として尾形道夫氏をお迎えできたことが大きかったと思います。演台を置かないステージにゆつたりと立たれて「暮しの手帖」らしい視点で、今どきの食について幅広くお話しくださいました。印象深かった幾つかをご紹介します。



食品を栄養の効果を考えて食べるというのは、60年代アメリカのヒッピーの自然食という考えから始まった。また70年代に発表されたマクガバ



藤井前副会長が尾形講師を紹介。

ン報告により高カロリーの欧米型食生活の害が言われ、代って推奨されたのが和食である。日本食が一つのブームとなった。食べ物に含まれる栄養素だけを取上げて、体に良いから食べるという考えがまかり通れば、マルチビタミンをのんでいれば良いことになりかねない。大事なことは、美味しいということだ。家庭で美味しく作り、食卓を囲む雰囲気大切なのである。

今、日本の食事情で問題なのは、中高年男性の肥満(栄養過剰摂取による内臓脂肪の蓄積)と、若い女性の痩せ過ぎ(ダイエットによる栄養不足)である。いろいろなダイエット方法が出てきたが、生き残っているものは一つも無い。マスコミも反省せねばならない。更に、尾形氏は「徳島で生れ育ったことが私の基礎になっている。どのように還元できるのか考えてこれからやってみよう」と結ばれました。内容の詰まった講演でした。(藤井記)



## 「母校だより」

城南高等学校長 鳥羽俊明



平成十七年度は、城南高校のこれからの方針が決定する大きな年度になります。四月二十二日の徳島県教育委員会において、本校に新しく「応用数理科」の設置が決定されました。この学科は、SSH事業の流れを汲むもので、我が国の将来を担う科学者、技術者、理科や数学の指導者の養成を

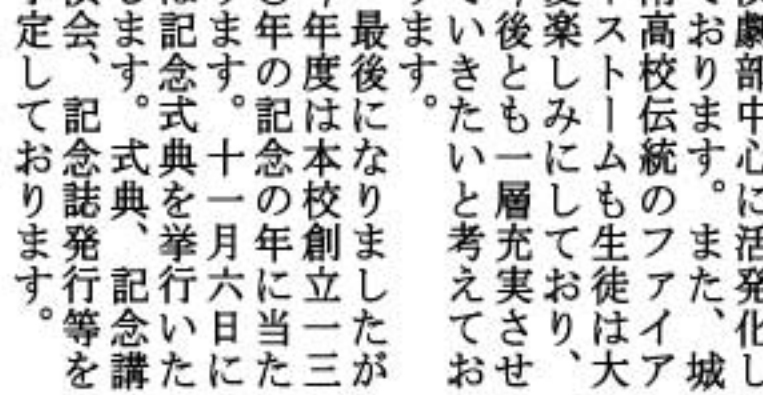
目指すものです。定員は四〇名、募集は全県一区で行います。五、六年後にSSH事業の指定研究が終わっても、本校発展の起爆剤として、教育内容の充実、普通科の理系コースとの有機的連携等により大切に育てていきたいと考えています。また、それに併せて文系コースの活性化のためにも、今年から二年生を中心に八月二十六日から九月五日まで外国語研修を実施します。行き先はシアトルで、ホームステイをしながら、午前中語学研修、午後実践、チャンスがあれば大リーグ、マリナーズ対ヤンキースの試合も観戦したいと思っています。

次に、本年度から校舎改築が本格的に始まります。校舎は管棟、文化棟、理科棟の三棟からなり、二期四年かけて平成二〇年度末に完成します。第一期は管理棟、文化棟、第二期は理科棟です。そして、外構工事も含め全体が仕上がるのは平成二一年度末になる予定です。また、新校舎の完

成に先駆け、制服の改定も検討したいと思っています。現在、思い出多いプールの跡地に弓道場とテニスコートの建設が進行中で、七月末には竣工の予定です。また、六月頃から八〇周年記念の建物、自転車置き場を解体し、仮設の自転車置き場の建設や工事の学習環境保全対策のためのエアコンの設置も進むことになっております。百周年記念会館は平成二一年頃に取り壊される予定です。生徒は勉学に部活動に一生懸命取り組んでおり、進学成績も市内の普通科高校に負けない成果が上がっています。部活動も女子バレー部の二年連続「春校バレー」出場、テニス男子の県総体二連覇、サッカー、陸上、ラグビーなど各部戦力アップしています。文化部も吹奏楽部、演劇部中心に活発化しております。また、城南高校伝統のファイアーストームも生徒は大変楽しみにしており、今後とも一層充実させていきたいと考えております。

最後になりましたが今年度は本校創立一三〇年の記念の年に当たります。十一月六日には記念式典を挙行いたします。式典、記念講演会、記念誌発行等を予定しております。

新校舎模型(平成20年度末 完成予定)





# 「渦の音クラブ」発足二十周年記念特集

母校は今年旧制徳中創立から数えて百三十周年を迎えました。  
 「渦の音クラブ」も発足してから三十年が過ぎました。  
 本号では「渦の音クラブ三十年の歩み」並びに、「いろいろな時代の母校の姿」を渦の音クラブ会員の皆さんの高校生当時の思い出を通して振り返ってみました。

## 「渦の音クラブ」

### 当年二十歳。

#### その誕生と、歩み。

常任理事 井形 節夫

\* 本原稿は、城南高校機関紙「渦の音」復刊第五〇号（二〇〇四年三月一日発行）に掲載されたものです。

城南高校の機関紙「渦の音」は一九〇〇年の創刊だそうだが、「渦の音クラブ」は、同窓会関東支部として、一九七三年（昭和四八年）に、母校創立百周年を期して結成されました。私は昭和二年生まれ、終戦直前の昭和二〇年に旧徳中卒業。旧徳島工専・薬学、明大・政経卒業後、旧徳中の先輩、故・森信真氏（昭一六卒）が社長の化学専門商社「森六（株）」に勤務しました。

一九七二年十二月青山会館で開かれた同窓会関東支部設立準備会（出席者三十三名）から帰った社長に「同窓会の事務局を引き受けてきたから頼む。」といわれてから以来三十年余常任理事として「渦の音クラブ」にかかわる事になりました。それ以前の準備期間（一九七二年六月の支部結成準備会・於学士会館等）は、学校長から頼まれた方々が、奔走してくれたようです。

さて、「同窓会を作るには」まず該当する会員の名簿を作らないといけません。霞ヶ関ビル六階の社長室に準備会有志が集まってもらい一九六八年発行の本部の同窓会名簿を基に、関東在住の卒業生の住所確認から始めて一九七三年十一月「渦の音クラブ名簿」第一号の発行にこぎつけました。（明治三五年卒から昭和四二年卒まで、会員数千六百五十五名）ワープロもパソコンもない時代でしたからそれは大変でした。交詢社、国際文化会館での幹事会等を経て、同年十一月二十六日、目白の椿山荘で二百余名の参加者を得て「第一回渦の音クラブ総会」を開催。活動を開始しました。

故・堀江薫雄氏（大正十一年卒・東京銀行頭取）を初代会長（一九八五年）に選出。会の目的を、母校愛の昂揚と会員相互の親睦、互助を図る事と決めました。

事業としては先ず母校創立百周年事業のための募金でした。一九七五年十一月の創立百周年記念式典までに八五〇〜八六〇万円集まりました。（当時の教員初任給は、八万円位）このお金は百周年記念同窓会館建設費の一部となり、今も皆さんのお役にたっている事と思います。

また、会員相互の親睦を図るためには毎年、総会・懇親会を開催してきました。当時はまだ旧徳中出身者が中心だったので若い人の参加を呼びかけようと卒業三十年目の学年を当番幹事として総会・懇親会を企画運営してもらうことにしました。

学年理事も学校からの推薦を基にお願いしました。一九八三年名簿二号を発行しましたが、住所変更等は社長自らチェック、当時は郵送代等の事務経費も森社長他、奇特な方々の厚意に頼っていました。

十三年間事務局を預かりました。森社長が永眠され、その頃庄野勝氏（昭七年卒）が社長で、お台場の「船の科学館」等を手がけていた不動産建設に事務局をお願いし、実際の事務は吉森越夫氏（昭三六年卒）が奮闘してくれました。一九八四年〜五年には創立百周年記念「アパバイ像（流政之氏制作）」建設のための募金、一九八八年には名簿三号も発行、総会出席者に配布しました。

100周年記念会館  
1974年11月完成  
一部4階建延1,033㎡



原安三部氏揮毫



## 母校創立130周年に寄せて.....明治8年(1875年)12月2日が城南高校の誕生日です。



↑昭和14年の旧徳中生(御親問拝受)



校舎 昭和三七(1963)年 周りは一面田圃 平成一五(2003)年



一 大正十年卒(百五歳)の柴山格太郎氏もお一人で鎌倉からご出席でした。

旧制徳島中学校 昭和十四年卒業 元「渦の音クラブ」会長 吉兼三郎氏の場合

私たちの旧徳中入学は昭和九年四月で、その前に旧校舎（現在の県庁の隣接地）から二軒屋の新しいキャンパスに母校が移転したその翌年である。従って、私達は新生徳中の第一期生である。

二年生の秋に九ノ里校長が急逝され、後任に深井源治校長が旧制六高から着任された。そして伝統ある母校史上特筆すべき「進学」を中核とした深井校長の特訓教育の洗礼を受け果立っていった。

もう十年前になるが、在徳の学友、細井・上崎両君らのご尽力で「昭和十四年記念誌」それぞれ二百頁に及ぶ同窓会誌が出版できた。当時の徳島新聞に紹介され好評だったようである。

想えば在校の昭和九年〜十四年という時期は、忍び寄る大戦前の緊迫した世相の日本であつたが、その僅か数年後に迎えたあの惨憺たる終末を誰が予想し得たであろうか。

想起するだに、わが徳中はまさに有史以来の激動狂乱寸前の徳中であつたんだ.....と感慨一入である。



一 旧制徳中卒の皆さんご夫妻で参加の方も！

会長も初代堀江氏から二代会長に平井学氏（一九八八年〜一九九一年・昭八年卒）、三代会長に吉兼三郎氏（一九九一年〜一九九五年・昭十四年卒）と引き継がれました。それぞれ各分野で活躍された郷土が誇りとする人物です。



110周年記念アババイ像・流政之氏制作

一九九三年吉森氏の転勤に伴ない事務局は榊大林組（当時副会長の篠原良男氏・昭一七年卒・大林組副社長）にお願いすることになり、同社の中岡茂樹氏（昭四六年卒）が、以来四年間実務を担当してくれました。

事務局といっても、専従職員がいるわけではないので、総会の案内状一つをとっても、当時の会員数二千三百名分の住所リストのシールを中岡君の指揮の下、大林組の女子職員が封筒に貼り付け、返信はがきをいれて学年理事に発送を依頼（不動産設の頃も同様。学年理事に出席者を把握してもらおうようにしていたが、中には学年理事止まり

ということも……）しかも、担当者の通信費立替分だけでも、数十万円という有様。これでは事務局担当者のボランティアの域を超えており、このままでは会の維持は困難という事から、故・犬伏孝治会長（一九九五年〜二〇〇〇年・昭十八年卒）からたまたま台が提案され、理事会で十二分に検討の結果通信費の名目で会員に年会費をお願いすることにになりました。この件は当初からの懸案事項であったので、役員一同ホットしたもので

す。ここに渦の音クラブの維持運営は会員全員で支えるという基盤が出来ました。ついでに本部の名簿業者に総会案内状の印刷・発送・会費納入書で總會の出欠返信はがきも兼ねるといふ事務局の運営に苦勞した中岡氏ならではの経費節減アイデアのおかげで、母校の女子バレーボール部全国大会出場やオリンピック出場選手のための応援寄付、本年度から発行の「渦の音クラブ会報」印刷費等の経済基盤が出来ました。

一九九八年から二〇〇二年まで、事務局は西松建設（当時副会長の金山良治氏・昭二四年卒西松建設社長）が担当。金山社長の分身のごとき秘書の宝来安徳氏が至れり尽くせりの同窓会運営をしてくださいました。二〇〇〇年には名簿四号を作りまし

た。金山氏は二〇〇〇年〜二〇〇二年の間会長も勤められ、男子校として一期だけあった徳島第一高等学校の卒業生です。

二〇〇二年からは会長に城南高校卒の遠藤哲也氏（昭二八年卒・今年SSH講演会講師）が副社長を務めていたイーグル工業（榊総務部の杉崎茂・平林夕子両氏が熱心に担当してくれました。

旧制徳中から、今年の總會担当学年の一九七四年（昭四九年）卒までは圧倒的に男性が多かった。一九七五年の卒業生からは女性のほうが多い年もあると聞きますが、関東地区在住の会員数は激減傾向にあります。卒業十年経過の関東地区在住者を会員として登録し總會案内などを郵送しています。現在会員数は約二千五百名を数えますが同窓会に興味を持つ会員が多くないのは残念なことです。卒業三十年に回ってくる「渦の音クラブの集い」の幹事当番は学年の結束を高め、学年単位の同窓会活動が盛んになるきっかけになっています。各種企画の中で先輩・後輩の交流も生まれます。

今年から事務局は常任理事の生田哲郎氏（昭四一年卒）の生田・名越特許法律事務所が担当してくれま

す。城南生の皆さんも、将来関東に住むことがあれば是非「渦の音クラブ」に参加してください。過去百三十年の歴史の中で多方面に足跡を残した人も多く、現在活躍中の方も大勢おられます。及ばずながら後輩の皆さんのお役に立てればと思っています。

最後に母校のますますのご発展を祈りつつペンを置きます。

本稿は、井形勲夫氏のお話を基に、歴代事務局担当者、吉森越夫氏・中岡茂樹氏（二〇〇四年二月逝去）の助言を得て、二〇〇三年十二月に遠藤公子（昭三七年卒・常任理事）が代筆したものです。

**旧制徳島中学の前身は明治8年に西の丸に創設された名東県師範学校附属変則中学校です。**

昭和二十年七月三日夜半、学期末試験を前にした徳島中学は、アメリカ軍B29による壮烈な焼夷弾爆撃により、徳島市諸共灰燼に帰した。私の徳島中学での最大の思い出である。それからひと月ちょっとで日本は負けた。

中学での教育の中で、校長深井源治氏の理念は出色であった。あの異常なまでの軍事色の中で、深井校長は一途に学問の道の追求を教育理念としていた。他の県立中学ではすでに二年生以上が軍需工場に勤労働員をさせられていたのに、校長は頑強に動員に抵抗し、昭和十九年になってやっと四・五年生の動員になった。進学にあたっては、陸軍士官学校や海軍兵学校などのキャリアを目指すよりは一高、三高、六高（彼の前任校）などの旧制高校への進学に重点を置いた教育を遂行した。当時の世相から考えこのような校長がよく存在し得たなあの感慨を持つ。

その深井校長もその年の十月に辞任したが、アメリカ占領下での教育を潔しとしない心情があったのではないかと思われる。

八月からは幸い焼け残った渭城中学（現城北高校・宝亀荒瀬校長）での二部授業（午前が徳中・午後渭中。或いはその逆）に焼け野原の徳島の街を涙町の間借住宅から田宮の渭中までの（約4kmぐらい）通学は、食い物のない栄養失調気味の少年にはこたえた。

阿州の英才に囲まれた青春の幸せ以外あまり良い思い出がない。

終戦の翌年の入学で旧制中学の最終年度となり、三年間で新制へ移行しました。徳中の先生方の印象は強く、皆アダ名で呼んでいました。当時の思い出を二、三書いてみます。

数学の授業は淡々として、あまり記憶にありませんが、先生は背が高くロングサンと呼ばれていました。或る学園祭の舞台で「ロングサンのピクニック」と云う演題がありました。長身の先生のあと小さな子供さんが二人そのあとに奥さんが続いているのんびりと舞台をひとまわり歩いただけでしたが、ほのぼのとした家族愛が溢れ出て巧まざる名演技でした。それから数学の授業が楽しくなりました。

また漢文の先生は優雅な雰囲気をもっておられ、チャイナと呼ばれていました。漢詩を中国語で歌う様に読まれ、詩韻の美しさを教えてくれました。その後私は高村光太郎詩集等を音読して覚えるようになりました。

それから音楽の先生ゲーヤンは発声法に熱心で、イエアオウの口の開け方が小さいと、先生の太い指が三本口の中に入られ、思わずゲーとなりしました。今も歌う時は思い出します。

他にもコピン、メツキ、ウシ等多彩な先生方がおられ、皆豊富な知識で学問の基礎を教えてくださいました。学友にも恵まれ、楽しい少年期を過ごせましたことを心から感謝しています。

……母校の思い出……

……母校の思い出……

旧制徳島中学校  
昭和二十四年三月（五年制）卒  
菊池安行氏の場合

徳島第一高等学校併設中学校  
昭和二十四年三月卒  
猪井昌幸氏の場合

旧制徳島中学校に入学し  
途中学制改革で  
学区制・男女共学となり、  
昭和二年三月に城南高校  
第一回(二二二名)卒業の

川人武樹氏の場合

思えば我々の中高時代は第二次世界大戦が終って間もない時で今の豊かさは無かった。しかし戦争の暗さをもう感じなかったのは若さのせいであろうか。私は徳島中学に入ったが学制改革により新制高校の城南高等学校第一回卒業生となった。学校では三木校長を始めとし優れた先生方が教壇に立っておられ英才教育と言えるレベルの高い教育を受けることが出来たことは幸せであつた。男女共学になつた新制高校ではホームルーム制といつて一年々三年生まで入つた地域ごとのグループが作られ担任の先生のもと課外活動や家庭的な指導もあり最近耳にする不登校問題など先取りした良い制度ではなかつたかと思つている。私は住まいが両国橋の近くにあり、第三ホームルームで担任は日野先生であつた。先生には大学受験の相談やご家庭にお伺いするなど大変お世話になつた。夏はホームルームの生徒が縦笛や太鼓を持ちより阿波踊りの連を組んだことなど今は懐かしい思い出である。



旧制徳島女学校(現城東)に  
入学し途中学制改革で  
学区制・男女共学となり、  
昭和二年三月に城南高校  
第二回(二二七名)卒業の

山本鈴子氏の場合

昭和二〇年四月、念願の徳女(現城東高校)に入学致しました。その年の七月の空襲で徳島市内の殆どと共に学校も焼失しました。八月一五日には終戦となり、その後学校は復興しましたが学制改革で併中三年卒業と高一年生との四年間の学生生活を終えて、新たに学区制(地域別)となり城南高校の二年生として本校に参りました。始めて男女共学となり、戸惑い乍らも新しい発見もありました。城南高校の同窓会名簿を拝見しますと、徳中の卒業生として、二人の祖父、父、叔父等八名の名前が残されています。創立一三〇周年を迎えて改めて自分も母校の卒業生として誇りをもち、残された人生を全うしたいと願つておられます。常任理事をお引き受けして、二〇年余りが風光の中に過ぎ、微力ながらもお世話させて頂き、立派な先輩方のご指導のもと、又今後は後輩の素晴らしき方々によって同窓会が益々発展なされる事を願ひながら終わりと致します。



選抜方法は地区制だったが、  
地区外から入学し  
昭和三〇年三月に  
第六回(三六八名)卒業の  
注一年下から家庭科が出来た。

中川勝博氏の場合

当時の高校の選抜方法はいわゆる地区制で地区外からの入学は厳しく制限されていたがそれでも当時の城南は徳島県内で一流大学への進学率が最も高い高校として人気があり、地区外からもあの手この手を使って入学していた。いわゆる「寄留」では駄目だと言われて、在学中だけ親戚の家に養子縁組をして(苗字が違って三年間は苗字が違っていた)通っていた生徒が私のクラスだけでも私も含めて三人もいた。それだけに、クラスの雰囲気は受験勉強一色といった感じで、クラブ活動や学園祭での楽しかった思い出といふのはほとんど無かつたといつてもよい。それでも、数学の担任で授業はほとんど英語で教えてくれ、時計を一切持たない主義のユニークな先生がいたり、城南高校へ赴任したこと非常に喜んでおられた国語の先生をわずかな間違えでも厳しく指摘してはクラス全員で(？)いじめたり、など授業そのものを結構楽しんでいたよきな記憶がある。



選抜方法は徳島市内一區、  
普通科・第八回(二五九名)  
家庭科・第三回(四四名)  
昭和三年三月に  
普通科卒業の

岡田陽子氏の場合

入学して驚いた。いきなり英語でつまづいた。先生の質問の意味もわからず、への河童というわけにはいかず唯ドキドキ。すらすら答える奴がいる！ 解析I、再試でも零点、前と同じ問題だったのに、ピカドンが落ちる。満点がいる！  
そこで発奮！しなかつた。これは敵わぬ、早々といち抜けてしまつた。そうしてみようと世界が一転、授業まで面白くなつた。ワラ半紙刷りの新体詩のプリントは宝物と化し、万葉集は遥かな世界の垣間見、古都の仏像の話が熱い日本史、幾何はパズル、漢文、物理においておや。一癖ある教師陣の導きにより刺激的な種蒔きの時になつた。(その後の発芽状況は不問に付された)

生徒の方もなかなかで、触発し合つて皆な背伸びをしていた。生意氣盛り、発展途上、無頼の徒の時を共有する中で、何にも益しかけがえのない恵み、生涯の友を得た。時を共有した間にのみ通し合う説明不要のやさしさ。

さて、卒業五十年を期に四国遍路に、というのが同期の課題である。



選抜方法は全県一區  
普通科・第十三回(三五九名)  
家庭科・第七回(五一一名)  
昭和三七年三月に  
普通科卒業の

浜尾重忠氏の場合

還暦を迎えた今も、故郷を離れた地にて、親しく付き合うのは、やはり城南校の同級生であり、中学校の同級生である。

私の城南での三年間は学校の雰囲気もそうでしたが、大学受験一色でした。一クラスに五、六人しかいなかった才色兼備の女子学生への恋心を封じ込め、ひたすら参考書、問題集と取組んでいました。今となっては振り返る時、勉強の思い出はほとんどありません。大合格と共に消えていきました。消したかったのでしよう。

しかし今でも鮮明に、思い出す光景があります。夏休みに人影の少ない学校のプールにクルスの友人と行き、ただ夢中で若さの限り泳ぎ、疲れ切った身体をプールサイドに横たえて見上げた空の青さ、泳いでいる時には聞こえなかった、シャワーのように降りそそぐ油蟬の鳴き声、プールの周りの田んぼの稲の青くさい臭い、その傍に咲いていたカンナの花の鮮やかな橙色、そして照りつける太陽。ああ、あれが城南の夏だった。

・母校の思い出・

選抜方法は全県一區  
いわゆる団塊の世代、  
生徒数ピーク、学生運動真  
盛り、ザ・ビートルズが来日  
普通科六〇三名家政科五四名  
昭和四一年三月普通科卒

生田哲郎氏の場合

夜も遅い事務所で、  
私は、複雑な契約書と  
格闘している。闇の中  
で、六本木の高層ビル  
が乳白色の夜霧に煙っ  
ている。私は、不確か  
な人生の時間軸の中で  
一人浮遊している思い  
にとらわれる。

こんな時、確かな時  
間軸で頭によぎるのは  
郷里阿波である。青々  
した水をたたえた吉野  
川、眉山から見下ろす  
三角デルタの眺め、そ  
して、母校城南高校の  
日々である。我々は団  
塊の世代、1クラスの  
人数も多く、クラス数  
も多く、廊下には人が  
溢れていた。頭の良い  
者だけでなく、聖火ラ  
ンナー、日焼けした水  
泳部員、重量挙げの選  
手、演劇の脚本を書き  
作曲をする者等、多様  
な才能とエネルギーが  
渦巻いていた。先生方  
も、博覧強記の知識を  
ましく立てる世界史の  
先生、馬鹿は相手にし  
ないとはかりに猛スピ  
ードで講義を進める先  
生、物理が好きでたま  
らないとの印象の先生  
みんな輝いていた。  
母校城南は、大都会  
で浮遊する私の人生の  
旅の原点である。



・母校の思い出・

選抜方法は全県一區  
普通科三九九名家政科四五名  
在学中は野球部で活躍  
当時の野球部監督が、鳥羽現  
城南高校校長だったという  
昭和四七年三月普通科卒業の

武田 稔氏の場合

文武両道・質実剛健を  
校訓に徳島県下から生徒  
が集い、町・市から県の  
スケールとなり、広さと  
奥深さを初めて体感し、  
文化・環境の違い、価値  
観の違い、思考の違いに  
驚き、戸惑いの日々が続  
続でした。ファイアー  
ストームは各クラスに  
分かれ、自分達で相談  
し、プロデュースし、  
クラスメイトと肩を組  
みかわし、気持ちを一  
つにし、寮歌・フォー  
クソング等声を張り上  
げ激しく踊り、頭の中  
が真っ白になるまで騒  
ぎ当に青春でした。

また、硬式野球部に  
在籍し新任の監督が現  
鳥羽校長であり、初々  
しく大学生の風貌が見  
え隠れし温かく指導い  
ただき、兄貴のようで  
した。高一の時、県大  
会でレフトオーバー三  
塁打を打ち舞い上がり  
スクイズのサインを見  
落とした苦い思い出。  
当時、県内NO.1投  
手から三塁打を打った  
嬉しい思い出。  
振り返れば、この高  
校三年間で社会人とし  
ての常識・ルールが養  
われた私にとって、原  
点の三年間と言っても  
過言ではないように思  
います。



・母校の思い出・

徳島市内普通科四校総合選抜  
制になって第一回の卒業生。  
家政科はなくなり普通科のみ  
四四七名・男女同数  
城南高校第二六回生として  
昭和五〇年三月に卒業の

島原裕司氏の場合

悪い記憶を忘れたわ  
けではありません。城  
南時代の思い出は、い  
いものがたつぷり。時  
代と仲間に恵まれたの  
でしょう。総選一期生  
のぼくたちは、「勉強  
もするが、よく遊ぶ、  
そしてエネルギーシユ  
ー」という城南の良き伝  
統と、個性的な先輩に  
恵まれたというのが実  
感です。眉山の麓とい  
う緑豊かなロケーション  
も好きだったな。そ  
して城南祭は本当に鮮  
烈な記憶です。文化祭  
にクラスでやった演劇、  
本当にマニアックに作  
りこみました。配役の  
延長で俄カッパルが何  
組も誕生したのも微笑  
ましい出来事でした。  
三度のファイアスト  
ームの夜は、毎回、友だ  
ちの家に泊まりこみ盛  
り上がった。炎を見た  
あとで大人しく家に帰  
るなんてナンセンス、  
ありえないってノリで  
したね。その夜の友の  
表情や、何を語ったか  
もよく覚えています。  
また、ぼくらの世代は  
日本のフォークと英米  
のロックの黄金期で、  
校内でギターを弾き、  
曲をつくり楽しみまし  
た。よく授業中に作詞  
していたものでした。

私達が城南高校に入  
学した昭和五六年は、  
徳島駅前の内町小学校  
が取り壊されそこの  
建設が始まった年です。  
国公立大学の共通一  
次試験の開始は昭和五  
四年ですから、徳島に  
も「全国標準」の波が  
寄せ始めた時期です。  
当時の城南高校は、東  
大、京大等の難関大学  
の合格者数が激減して  
いました。そこで、文  
系・理系各一クラスが  
「応用クラス」として  
編成されましたが、学  
年一丸となった生徒会  
活動等は非常に盛んで  
した。特に、ファイア  
ーストームの存廃に関  
する数時間に及ぶ生徒  
会総会での激論は今も  
鮮明に憶えています。  
高三の夏休みには、有  
志約五十名による中津  
峰山での受験合宿も開  
催されました。夏休  
み中は、クーラーのない  
学校の教室で勉強する  
仲間が多数いました。  
また、私が所属してい  
た新聞編集局の「城南  
高校には校則は必要か  
？」の特集記事等を踏  
まえ、後に「自主・自  
立」の校風碑が建立さ  
れたことは、城南の素  
晴らしい伝統が残って  
いる証と思います。



・母校の思い出・

総合選抜制が当たり前になり  
つつあった。でもまだ少しは  
かつての城南の栄光の余韻も  
残っていた。普通科のみ  
(四四四名)第三五回生として  
昭和五九年三月に卒業の

三橋浩志氏の場合

現在、特許庁に勤務  
していますが、まさに  
知財立国実現の最前線  
といった感じで何かと  
日々慌ただしく、なか  
なか過去を振り返る余  
裕ありませんでした  
が、今回、このような  
原稿を書く機会をいた  
だきのんびりと昔のこ  
とを思い出してみまし  
た。

私が生まれ育ったの  
が城南高校のすぐそば  
ということもあり、高  
校はまさに庭のような  
存在でした。小さな頃  
から格好の遊び場とし  
ていたためか、高校生  
になっても遊び場気分  
が抜けきらず？音楽や  
文学ばかりに夢中にな  
って、今思えばもった  
勉強をしておけばよか  
ったと反省しきりです。  
しかし、人間はなかな  
か変わるものではな  
く、今年も正月から年  
甲斐もなく校庭で風揚  
げをするなど相変わらず  
城南高校を楽しみ続  
けています。  
このように城南高校  
では、恥ずかしながら  
「楽しかったなあ」と  
いう印象しかないのだ  
ですが、この楽しかった  
思い出が今の自分を支  
えているのだと思っ  
ています。



・母校の思い出・

総合選抜六二年から推薦入  
学制度実施。この年青函ト  
ンネル、瀬戸大橋が開通。  
第三九回生(四九一名)とし  
て、昭和六三年三月、元号  
昭和の最後の年に卒業の

村上 聡氏の場合

現在、特許庁に勤務  
していますが、まさに  
知財立国実現の最前線  
といった感じで何かと  
日々慌ただしく、なか  
なか過去を振り返る余  
裕ありませんでした  
が、今回、このような  
原稿を書く機会をいた  
だきのんびりと昔のこ  
とを思い出してみまし  
た。

私が生まれ育ったの  
が城南高校のすぐそば  
ということもあり、高  
校はまさに庭のような  
存在でした。小さな頃  
から格好の遊び場とし  
ていたためか、高校生  
になっても遊び場気分  
が抜けきらず？音楽や  
文学ばかりに夢中にな  
って、今思えばもった  
勉強をしておけばよか  
ったと反省しきりです。  
しかし、人間はなかな  
か変わるものではな  
く、今年も正月から年  
甲斐もなく校庭で風揚  
げをするなど相変わらず  
城南高校を楽しみ続  
けています。  
このように城南高校  
では、恥ずかしながら  
「楽しかったなあ」と  
いう印象しかないのだ  
ですが、この楽しかった  
思い出が今の自分を支  
えているのだと思っ  
ています。

